



* M 0 1 2 2 H 0 0 0 Y M A C C 1 2 0 7 0 9 0 0 0 0 0 4 7 2 *

22日付 山城A朝刊通し
2021年01月20日11時23分20秒
PDFゲラ出力

◎E・新随想箱
ID=CC120709000000472
校正回数=70 79倍 0× 23行 0

随想やましろ

昨年くらいから彼と話をすることが増えたように思う。しかし、話す内容はいつも同じようなもので深刻なものはない。例えば飲み会で耳に入っただお酒の席だから許されるような話のようなものである。それを思い起こして二人で笑う。それだけですが。そしてそれは消えるように終わる。人がその時の私を見たらにやにや顔で独り言を言っている変な人に見えるかもしれない。



門阪 庄三

昔は彼の仕事部屋か仕事帰りの車の中で1時間以上も話したものです。軽口から始まるが、大半は真面目な話だった。着実なやり方で院長にまですなつた彼は自分のキャリアを病院の未来に重ねて話すことが多かった気がする。若くして院長に上り詰めたことを幸運だったと自分自身に言うように言うこともあった。私はと言えは彼ほどの野心

独り言も暮らしの一部

も才能もないので新しい医療技術やチーム医療の話をしたように思う。今は私が復床に滞った時や一人で仕事している時に彼の方から訪ねてきてくれる。話すことは先に書いたような簡単なもの。少し話してニコツと笑っておしまい。相手の彼はもう10年も前に亡くなっているのに新しい話題はない。その時私は眠っているわけではないので夢を見ていると言ったのではありません。また、亡くなった人の面影を懐かしんで回想するのも違う。亡くなった両親によびかけるも無言の返事をくれることはあります。それがそれとも違う。彼の場合には彼の方から私の手の空いた時にちよつと訪ねてくれる。「ちよつと近くまで来たので寄ってみたように現れて消える。彼の方が私に近づいてきたのではなく、私の方が彼に近づいているのかもしれないと考えてみたこともあります。年を経て新しい友ができていくようになったので誰かが私の寂しさを察してくれているのかもしれないと考えてみたことも。しかし今頃は、先に逝った人とのこのような時間が増えてきたのは、私自身が独りよがりになってきたせいかもしれない、と自戒することになっている。(かぞさか内科クリニック)